



## 左千夫歌論小考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 薄井, 忠男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000375">https://doi.org/10.32150/00000375</a>

## 左 千 夫 歌 論 小 考

——その背景と主体的位置——

薄 井 忠 男

北海道学芸大学岩見沢分校国文学研究室

Tadao USUI : The Poetics of Satio

小田切秀雄氏は『抒情詩論への一寄与』<sup>1)</sup>で「抒情詩の本質に関する立入った省察に於いては常に貧困の状態を脱することが出来ず、ひとり左千夫に於いて豊饒なみのりを有つことが出来たと呷うなら、より真実に近いであろう」と言う。そのすぐれた抒情詩の本質論である彼の歌論は、例えば与謝野晶子の歌を評しても「その批評は子規の批評のように明解によく痛所に中つて居るとは言えない」<sup>2)</sup>底のものであり、「左千夫があれほど熱心でありながら、さほどに当時の歌壇に反響を与へ得」<sup>3)</sup>なかつた。この事実は、「正当な学問」<sup>4)</sup>を持たぬ故に論理の明快さを欠いたという点もあるが、より「新しきものにかぶれて、うはツ調子であつた」<sup>5)</sup>当時の歌壇文壇が、彼等のいわゆる万葉調を見向きもしなかつた時代性ないしは社会性によると見るべきで、いわば明治という時代、特にその未葉前後の錯雑した現実の中に位置づけて考えるべき問題であろう。

—

伊藤左千夫は元治元年<1864>千葉県上総国武射郡殿台村<現在山武郡成東町殿台>に生れた。父伊藤良作、母三木氏ナツ、その四男であり末子であつた。名は幸次郎、家は中どころの農家であつた。即ち彼は明治の年代よりは四才上であり、師の子規よりは三才年長で、歿年は大正二年七月三十日<1913>であるから、まさに明治という時代を身を以て生きたということになる。風巻教授は、『芳賀矢一と藤岡作太郎』<sup>6)</sup>で次の如き論をさしている。

「矢一の年は明治より一年上である。自由民権思想の下火になつていつた中で成人に達しようとした彼は、国粹主義の勃興する時勢の中で二十代の自分を作りあげることとなつた。そして明治二十七八年戦役によつて、当時の国民的な情熱は自信にたかまり、外国の認識に対するやや現実ばなれのした飛躍を伴いながら対等互角に自らを感じたいと欲した」「こうした線から見た、明治二十年から三十年代にかけての一時期は、政治的情熱と文学的思潮とが微妙に共和していた珍しい期間であつたようで、殊にその時期を主体的に生きたのは明治と年齢をひとしくした世代の人々であつた。矢一はその稀有に幸福な代表選手の一人であつたわけで、その国学的な愛国心はその政治的な国民的高揚と取りも直さず同じものであつたと言えよう」「そこには個人的な条件による強い個性的な人生上の問題把握というものはない」「時代が感動する所を感動し、時代が問題とする所を問題とすることであつた」「矢一の場合は国民一般の時代的的最大公約数として見られるような国家主義であり、民族主義であり、浪漫主義であつた。」

この論文は芳賀矢一の主体的な立場を時代性の中にとらえられたものであるが、子規にしても左千夫にしても、「国民一般の時代的的最大公約数」としての明治人を考えるならば、かなりその立場を

明確にあてはめて考えることができるのではなからうか。

左千夫は十八才<明治十四年>の時元老院に建白書を送っている。それは「伊藤良作四男伊藤孝次郎満十六年八ヶ月」<sup>7)</sup>と書し、富国強兵の策を論じたものであつた。<sup>8)</sup> 当時の自由民権運動の風潮が、このような建白書を少年をして書かせしめたのであろうが、子規もまた、少年時代に政談演説めいたものを盛に試みている。<sup>9)</sup> そして左千夫はこの年、政界の人たらんという希望から上京し、明治法律学校に入学しており、眼疾のため退学したが、二十二才<明治十八年>再度家出の如くにして上京、実業家たらんとして牛乳業に従事した。<sup>10)</sup> これら一連の行動は、明治十年代の時代性を敏感に受けとつた年少多感の言動であつたと言える。

明治を「主体的に生きた」「世代の人々」としての子規と左千夫には、しかしながらその主体性に於いて非常な開きをもっている。子規は改革者として二十年代にいち早く理論面に活躍していたが、左千夫が真に歌作に従うのは子規庵を訪れた三十三年<三十七才>に始まると見てよく、しかも歌作に対しては市井の趣味人としての意識が強い。明治の改革者の多くが、旧士族或はそれに類するものであつたことは、当時の文化の進展度に徴してやむを得ぬことではあつたが、子規もまた士族として新時代の文化を開拓する指導者的プライドを固くその根柢に蔵していた。

「常盤会ハ士族のミを給費生とすることハ私兼てより遺憾とする処なりしが今度愈村上文太郎の如き平民を採用せられんとあるハ実に一層の区域を広めたる者にて大賀すべきことなれども兎角町人杯のなりあがりたる者ハたとひ学問ハいかに能く出来るとも小成に安んずるの心と（此中に自慢心杯といふ元素あり）交際をしらぬ風あり（人と齒せざるの風ある也併し豪家杯の息子は此限にあらず）大概之者か此二者之中一者の欠点ハある者也今日之實際に照して御覽被成候ハ御感しなざるゝ処の者ありと存候」<sup>11)</sup>

このことは、二葉亭が外国語学校を中退した事情にもあらわれていて、必ずしも平民蔑視というのはあたらぬが、彼らが指導者的特権を意識していたその自負と見るべきであろう。

とまれ、かかる士族の改革者としての先進者的意識は、「個性的な人生上の問題把握」というよりは、時代を己のものとする方向が強かつたから、自我確立の三十年代後半以後には、その役割を一応完うして退ぞかざるを得ない運命を荷なつていた。その意味では、子規はまさによい時期に死所を得たとも言うべきであろう。

近代自我の確立は、同時に文学の確立でもある。だから士族ではない平民の間にこそ真の意味で自我確立の要求は強く支配したはずで、都会風な硯友社文学を打倒することをもつて当面の問題とした自然主義の作家達には、地方的色彩が濃厚であつたのも偶然とは言いきれぬ暗示的なものを感じる。農民出身の左千夫が、自らの短歌抒情を確立するためには、まさに明治末年の自我確立期を待たねばならぬ事情があつたのである。ところが、明治末年の錯雑とした現実の主体をなすものは、実は明治と共に生きたジェネレーションとは次元が異つていた。その表面的な相剋は左千夫とその弟子達との間に於ける意見の反目として見られるが、これはひとり根岸派短歌の現象だけではなく、こうした傾向はそれに先立つて新詩社『明星』の鉄幹と新人達の反目離反という形にも見られた現象でもある。<sup>12)</sup> このような現象は、所詮は明治人と大正人との時代的年齢相の違いに起因するものであろう。当時、青年層を蕩揺せしめた新しい思潮としての社会主義思想は、四十三年の幸徳秋水事件にその一面が明らかにあらわれており、明治天皇崩御並びに乃木大将の殉死というまさに明治的倫理に対する受けとり方には、両者に大きな逕庭を見ることができる。<sup>13)</sup> 明治末四十年代から大正初期にかけての一時期は、当時の青年達にとつて明治的精神に疑問をもたらした。幸徳秋水の事件は、この明治的なものに対する最初の反撃であつたはずだし、形の上では異なるが白秋・李太郎らの明星脱退も、左千夫と茂吉・赤彦らとの反目もこの時代相の中にとらえられなければなら

ない。そして啄木は、ここに社会主義への契機を得ているのであつた。抒情とは旧論理への反撥であり、抒情詩は新倫理形成への歌声である。欽定憲法によつて培養され、「天長節と君が代と、そしてあやに畏き教育勅語に象徴された国民感情」<sup>14)</sup>としての明治精神は、明治を生きた明治の人間にとつては実体であり真実であつた。というより、国民一般は、その壮重な雰囲気眩惑され、眩惑の中に明治の人間像が形成されていつた。そのような人間に最初の蕩揚がおしよせた。即ち三十七、八年戦役後の時代面にみた一つの反省期には、藤村・花袋らにみられる中年層の恋愛告白が「真実」という言葉にたすけられながら、自然主義的倫理として形成されて行く、いわばとどされた青春からの遅咲きの自我の芽生えが、左千夫には「恋の籬」の連作を成立せしめ、彼の抒情がこのあたりに形成されていつたと見たならばうがちすぎるであろうか。<sup>15)</sup>しかしいちはやく大正の新時代が、これら中年層と化した明治的精神に対立していた。だから、いわば左千夫は、二十年代の改革者たらんとして政治を志して得ず、完成期には遅咲きの自我として不十分さがあり、明治末年の過渡期的位置に据えられた人間である。

子規は業半ばにして倒れたが、それはむしろ幸であつたかも知れぬ。改革が完成された時は、革新者の任務は一応完了している。その展開は後進の手にゆだねられて個性的な展開が行われるべきで、左千夫はだから後継者として子規の足跡の上に立脚すべきであつたし、それは理論的な改革に対する肉づけとしての実行であり、子規の理論による短歌の抒情詩としての定着を目途するものであつた。「言うならば抒情詩の原型的なものえひとすじの憧憬であつた。」<sup>16)</sup>ところが、彼の抒情詩論は、「再びよみがえらせるすべをもたぬ日本の幼年期の美しさと偉大さを以て後世のすべての下降せる抒情を論難し、今ひとたび万葉の世界へ抒情を恢復させようと熱望した」ところに時代的錯誤によつて、明治時代の「抒情の要望者とはなり得なかつた」という宿命をもつたのである。彼が時代の過渡期的現象の中に、過渡期的人間として位置づけられる理由はここにある。自然主義全盛期には少し立場を異にして古く、明治のロマンチズム短歌には或意味で少し先んじた彼の抒情詩論に於ける省察は、後に「豊饒なみのりを有つ」たに拘らず、遂に時代の与望をになう寵児とはなり得ず、しかも彼の許から巣立つた新人達とも意思的乖離をみななければならなかつたということは、まさに明治的精神の宿命を象徴するが如くに見られる。

## 二

左千夫の歌論の代表的なものは、『強いられたる歌論』〈大正元年〉以後の極めて晩年の論説によつて特色づけられるが、その根幹をなすものは子規継承の線上に位置づけられる。彼の歌論は、子規の晩年、子規の歌論が一応の落着き場所を得た明治三十四年「新歌論」の発表によつて出発すると見てよい。即ち「予輩の意見は古今集よりいへば革新なり、万葉集よりせば復古なり。復古と云ふと雖も調子の上に於てのみ。句法の上に於てのみ。調の上に於てのみ。その思想材料に至つては現下の事実を歌ふや勿論のみ。洋語漢語新事物、打こなしては万葉調たらしめんと欲するなり。」<sup>17)</sup>という意見は、明星派浪漫主義短歌の隆盛期に、短歌の復古か革新かという危いぎりぎりの線上に立つて、万葉伝統の立場を近代に於いて享受しようとする極めて大胆な宣言といえよう。しかもこの復古か革新かの批判は、伝統主義にたつものの当然荷なうべき宿命であつた。

万葉主義ということにおいては、左千夫は子規の啓蒙のあとを承けて、直ちに万葉集の詩的精神に触れて行くことのできる幸運にめぐまれていた。それ故「万葉の歌を以て有の仮に思ひづるままに詠めるなり。質朴にして華麗ならずと為せるが如きは万葉の一重だも理解せざるの陋見のみ」<sup>18)</sup>と喝破したのは、子規が改革の範として写實的立場から万葉集を信奉したのに対して、万葉集を完成された芸術作品として対決しているのである。即ち子規の万葉主義に見られる著しい特徴

は「万葉崇拜家なる者は多く万葉の区域（否寧ろ万葉の或る部分）を固守して一步も其外に越え」<sup>19)</sup>なかつたとして、万葉集を全体として受けとり、むしろ後世の万葉調歌人、古今、新古今調の臭味濃い時代の革新的歌人群に研究のメスを向けたのであつたが、左千夫はこれを出でてさらに発展せしめ、「万葉の世界へ」の「恢復」という主体的なむしろ生理的な要望にまで立至つていたのである。

左千夫のこのような態度は、子規の歿後「他の指導に依頼して暢気な行路をたどりし吾々、俄に自動的に道を求めねばならぬ境涯、なまけては居られ申さず候」と言い、「先生が数年に渡れる製作及び選評の跡を見て、前後を比較し進歩変化の様を十分に考慮し、就中晩年変化の跡は最も細心に研究して、先生が微細とする所をも探求せざるべからず」<sup>20)</sup>とする子規継承の態度であつた。そしてそれはさらに、「子規子の研究態度は文学は只文学を目的とし、歌は只歌を目的と為すといえる見地に立ちたるものと見るべく、従つて其の作物の跡に就きて見るも、自然を親しみ人生を傍観せるの趣」であつたが、「文学美術上一切の問題が、人間の研究を根本とせるが如く、歌に於ても勿論寧ろ人間其の物に最も直接なるべき」であるとし、「作歌理想は子規子時代と頗る其の中心を異にし、明確に其の然るべき理由を自覚せり。故に其の態度は自ら人生を親しみ自然を傍観するに至れり。」<sup>21)</sup>というところにまで進んでいくのである。それはまた、「吾々は子規子の置いてゆかれた檣原にこびりついては居られない。子規子の通つた跡を追つて許りは居られない。即ち子規子のやつた事をやつては居られない。子規子のやつたところに足を踏出さねばならぬと信じている。それが即ち子規子の希望に添う所以であると信じているのである。」<sup>22)</sup>という態度に立脚するのである。

左千夫のこのような子規継承の態度は、子規の切り拓いたところを墨守するのではなかつた。「自働的に道を求める」という発展性が、「時代精神との交渉」<sup>23)</sup>の上にもたらされた必然的な結果であつた。ところで「殆ど絶対とも云うべき程子規を渴仰」<sup>24)</sup>していた彼が、子規を墨守せずして「自働的に」発展して行つた時、真に子規を継承したところのものは何であつたか。それは子規の発明にかかわる短歌の上に於けるリアリズムに他ならないといえよう。

言うまでもなく子規の「写生」は、きわめて素朴な意味に於いて言うリアリズムであつたから、後に島木赤彦や斎藤茂吉によつて体系づけられた「写生説」のように複雑な内容をもつものではなかつた。左千夫が写生という語を用いなかつたことについて、茂吉は「先生はそれは『写実』と称して真実の『写生』を実行したものである。」<sup>25)</sup>と言つてゐるが、子規にしても「実際の有のままを写すを仮に写実という。又写生ともいう」<sup>26)</sup>と説明しながら、「生の写実と申すは合理非合理事実非事実の謂にては無之候」<sup>27)</sup>とも言つて、後の「写生説」にその根拠を与えているのである。即ち「有のまま」を写すということは、必ずしも客観化された事実のみを写すことではないのであつたが、子規は「自然を親しみ人生を傍観」したから、いきおいそのリアリズムは限定されたのである。それを押し拡げ、本来の「合理非合理事実非事実の謂」ではない写実を論じたのは左千夫であつた。

「歌譚抄」は長塚節の写生論に反駁した論であるが、「我々の今日の立脚地が写実にあることは、『馬酔木』初刊の万葉論中に於て僕は十分に論じて置いた筈だ。従つて今の『馬酔木』誌上に殊に写生歌なるものを認めて居らぬ」<sup>28)</sup>と言つてゐる。その『万葉論』には、「人麿の歌を優れたりとなし成功せりとなし、然も其の系統を逐わずして、比較上劣れりなし未だしとなす所の憶良赤人の精神を継いで、より進歩的写実趣味の成功を逐げんとするは、他なし、形式趣味主調子趣味の單純にして変化に乏しく、到底時代思想に適應せざるを以てなり」<sup>29)</sup>と、彼のいう写実はだから自然よりも人生に対して深い関心を抱く彼本来の性格から来たものであると同時に、「時代思想」のもたら

すものであつたのである。節はこの時、「直ちに天然に接触して写生するのが現在の急務である」<sup>30)</sup>とし、その写生の根拠を「俳句の趣味を解するのは主として客観の趣味を解する」<sup>31)</sup>という子規の俳句の境地に求めたのであつたから、それはもつぱら自然を主とするものであつた。その点に於いて左千夫と節に、子規継承上の態度の相違がみられるであろう。この点に子規的リアリズムの展開としての左千夫的リアリズムが認められるとすれば、子規の態度を「絶対的傍観の見地」とした彼が、「学問でも出来ない。知識でも出来ない、才気でも出来ないのが詩である」<sup>32)</sup>と悟入するに至つて「生命ある歌」への省察となるのである。

さて左千夫の歌論に於ける万葉論、写実論は、ともに子規の継承の上に築かれた発展であつた。そしてそれがとりもなおさず彼自身の新境地の展開であり、リアリズム短歌論の一つのピークを形成して行くのであるが、生命論人格論にまで遡り、人間並に自己への省察によつて遂に彼独自の抒情詩論を成立せしめるに至つた。勿論その抒情詩論は、「明解」さに欠けるところがあり、未だ時流に迎えられるところのものとはならなかつたが、その展開上に位置する赤彦・茂吉の業績によつて近代歌論に大系づけられていくのである。

### 三

左千夫の「生命主義」から生まれた彼独自の抒情詩論は、いうまでもなく最も晩年の立論である「叫びの説」に結晶されている主張である。それは新進門弟子との間に意見の離反の因をなしたところの、いわば新傾向への反対論であつたが、明治四十五年四月の「強ひられたる歌論」から「叫びと話」〈大正元年九月〉「叫びと俳句」〈大正二年六月〉に至る一連の論である。この論は、この時期に至つて突然あらわれた新意見ではなくて、もつと根本的な彼の資質と、純粋な文学的詩論に立脚する左千夫本来のものであつた。

左千夫はいまだ子規の門に入らなかつた以前、「非自讃歌論」〈明治三十一年二月十日「日本新聞」〉を發表した。その論はまだ幼稚なものであつたが、「歌は心と調と両ながらまたきを要するぞかし」といい、次いで「小隠子にこたふ」〈明治三十一年二月二十三日「日本新聞」〉では、「夫れ詩の上に於て調と称する者は句の上に就いての意味にあらず。句々を連接する即ち一詩を形成する技倆よりあらわるる結果を名づくるの意味なり。只形などと云ふ様な単純不動的な言語にあらざるなり」というような、短歌の本質に対する考えが既にうかがわれるものであつた。「心と調」の問題も「一詩を形成する技倆」も、言つてみれば個性の表現を意味したものと見えよう。子規が「歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりと謂ふて何の故障も見ず、歌と俳句とは只々詩形を異にするのみ」<sup>33)</sup>というような、最初形式主義的理論から入つたものとはそもそも出發を異にしている。それは先にもふれた如く改革者としての子規の立場と、継承者の左千夫の立場として後にも現われる相違であるが、「宗教を信ぜぬ余には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者には神の救ひの手は届かない。仏教を信ぜぬ者は南無阿彌陀仏を繰返して日を暮すことも出来ない」と晩年の病床の痛苦の中から、「耶蘚信者某一日余の枕辺に來り説いて曰く此世は短かいです、次の世は永いです、あなたはキリストのおよみ返りを信ずる事によつて幸福であります。余は其の好意に対して深く感謝の意を表する者なれども、奈何せん余が現在の苦痛余り劇しくて未だ永遠の幸福を図るに暇あらず。願くは神先ず余に一日の間を与えて二十四時間の間自由に身を動かしたらふく食を貪らしめよ。而して後に徐ろに永遠の幸福を考え見んか」<sup>34)</sup>という人間を待み己を待む子規の態度に対して、左千夫の「宗教なるものに対しては、予はどこまでも受動的な位置を安ぜんと欲するものである」<sup>35)</sup>とし、「吾等固より凡夫には候へども、不思議なる導きに依つて、尋常人の容易に至る能はざる所に参居り候」<sup>36)</sup>という他力本願の浄土真宗信徒となり歎異抄を愛読した態度との間

にはおよそ対蹠的なものがある。

左千夫が他力を恃む心は、子規尊崇の態度にも現われているが、<sup>37)</sup> そのような本来主観的な他力本願に対して子規の客観的態度が移植されるためには好個の場所でもあつた。だが同時にこの主観的な態度というものは子規の客観をも純化融合せしめて主体的な文学的リアリズムを醸成せしめる結果をもたらした。それは彼の茶の湯趣味<sup>38)</sup>にも見られるように、広く他の趣味界に対する興味感興が、趣味人としての立場を与えたこととも関連するであろう。

いわゆる文学に対して、左千夫は趣味的な考えをもつていた。丸山静氏が「彼もまた明治的立志伝中の一人であつた」「いいかへれば彼の文芸はいかなる意味に於ても理智の過剰の所産ではなかつた。」<sup>39)</sup>と言つているのは、彼の明治的なものの本体が、どのようなものであつたかを明確に指摘しているであろう。ところでこの趣味的な態度は、子規との交渉によつて純化され、文学の真実に迫ろうとする。だがそれは対社会的な人間とか、自我意識の過剰とかいう形ではとらえられず、「個人と社会とは美しく調和した」<sup>40)</sup> 相に於いて、「人間自覚といふ社会的課題が、彼に於ては全く個人的に理解され」たからそのかぎりに於いては「人格」の問題が根本になり「人格をさへ完成せしむればよい、それが一切を解決すると考へ」<sup>41)</sup> るに至るのである。与謝野寛が「今の歌壇には口でこそ個性の発揮を叫び、新詩社の作物を漫罵する人々などもあるが、其等の人々の作物を読んで見ると真実に自家の個性を尊重して居る詩人の作だと思ふものは甚だ稀である。」「此点に於て正岡子規君の薫陶を受けた香取秀真伊藤左千夫氏等の謂ゆる根岸派の歌は、毫も新詩社の歌などに雷同する事なく、宛ら別天地の人々の如く特異の作風を守持して其発展を企図して居る。自分は根岸派諸君の此の態度に十分敬服せざるを得ないのである」<sup>42)</sup> といつている「個性尊重」はしたがつて「特異」なものとは言つても、「理智の過剰」から「都会のデカダンス」に耽溺していた若い青春期の文学青年とは別種のものであつた。それは、「歌は新しい為に価値があるのではない。生命があつて始めて芸術であるのである」<sup>43)</sup> という純一なる精神主義に立つているのである。

明治的精神を明治と共に生きたところの左千夫にとつては、その最大公約数の「国民感情」は主体的なものとして充分実感されていたから、「明治」に対しての反撥も反感も生まれる余地はなかつた。その実感の中に「個人と社会とが」美しく調和されているものと信ぜられていた。だから、彼が真に自己の立場を確立しなければならぬ時期が、偶然にも錯雑した現実である明治末年から大正初年代に遭遇したということは、まさに悲劇的であつたとも言える。それにはこのような事実からも見られる。明治四十三・四年の頃にかけて、アララギに新風が生れた。それは「千櫨のは序歌など用ゐて一読古いやうであるが、これには新鮮な感覚が盛られてゐるのであり、今から振返つて見ても相当の佳作であるが、柿の村人、茂吉等のものは、動揺が見え、拙さの隙が目立つて具合が悪い。それらに対して左千夫翁が大體賛しなかつたのは一般歌壇の傾向にむかつて賛成しなかつたのと稍別な意味で異見を持つてゐたと観察することが出来る」その動揺は、「千櫨のもの、柿の村人のものなどは一変化を来してゐる。同じ客観的のものでも千櫨・文明・憲吉等諸氏のものとは従来のものに比して何処か新しかつた。その新しさは一面からいへば周囲の新運動への参加とも看られるが、この由緒に就ては西洋文学もあらうし、造型美術もあらうし、当時の日本文壇もあらうし、そう簡単には行かない」<sup>44)</sup> のであるが、例えば鷗外の観汐楼歌会以後、一般歌壇に根岸派短歌の存在を印象づけると同時に茂吉と白秋との交渉<sup>45)</sup>の如く、スバルの耽美主義的な方向への接近や、千櫨の自然主義への接近、赤彦は新時代に触れるべくわざわざ信州から上京して絵画展をみていた如きそれである。そしてその結果はアララギ誌上にも「イェツの訳詩を載せたり、モーパッサンの月光を載せたり、大須賀乙字氏の説をのせたり、阿部次郎氏の文章を載せたり」するに至るのである。<sup>46)</sup>

千樫が「古くより作れる標準と主義とを案じて先ず自ら羈絆拘束を求むるを急がずして、其感受性の拡充に努め、以て新しき流れの底に漲れる大きき力を感じ得せざるべからず」<sup>47)</sup> といっているのも、この新傾向の立場を言うのであつたが、これら新傾向に対して左千夫のとつた態度は極めて冷淡なものであつた。遂に四十五年には「千樫と私（茂吉）とは堅い決心を決めて」アララギ廃刊の事を相談するまでに相互の間は相へだたつてしまつた。それは「子規在世時代の自然に対する看方の型に安住せず、もう一步深く自然に肉迫したとも云へる」<sup>48)</sup> という茂吉達の変化に対して、左千夫が「一時は無性と痛切がつた色調が見えたりしたが、今では只々新しがりの一調子と相成候」<sup>49)</sup> という「新しがり」「痛切がり」のスタイルと見ていたところに起因する。しかしながら既に啄木が社会対人生の問題に疑問を挿しはさみ、自ら懊悩混迷していたという時期であつた。左千夫は「悲しき玩具を読む」<sup>50)</sup> に於いても、「石川君のやうに考へ歌と云ふものに、さういう風に這入つて行かねばならない道もあるだらうと首肯される」と認めておりながら、「吾輩は生活上心に浮んだ刹那の感じに、作歌の動機を認めるにしても、心に浮んだ刹那の感じを直ぐ其の仮歌にして終りたくないのである」と啄木の本質即ち対社会との対決にはふれていないのである。茂吉も赤彦も千樫もそして白秋・勇を含めての新しい時代、即ち「新しい青春期」を理解することが、事実上明治の彼には不可能になつていたのである。左千夫のこの位置は、言い換えるならば寛と明星の新人との関係と似ている。「時代への適応」と言いながら、それは明治的時代への適応であつた故に、新しい大正の時代への適応は彼の写實的リアリズムでは追従不可能となつたのである。彼が「人生を親しみ自然を傍観する」ことを強調したことは、あたかも三十年代末葉から四十年代にかけての文壇的思汐である自然主義のそれに酷似していたが、しかも自然主義文学は、現実生活をありのままに直視することによつて、人間性の真実を追求するのを本来の目的としていたのであるから、人間問題が中核をなしていた。しかしながらそれとかれとは本質的に相異なる地盤にあつたと言わざるを得ないものがあつた。

一体自然主義文学の生れた当時の雰囲気はどのようなものであつたらうか。明治三十年代の中葉から後期にかけて、新しく目立つ精神的志向は、「個人意識の強調であり、自我の認識覚醒にともなつて起つた神秘的、宗教的傾向」<sup>51)</sup> であつて、それは文学と宗教との接近となつて現れ、姉崎汐風や綱島梁川の諸論文、蒲原有明の詩、泉鏡花の小説がよろこばれるというような時代的雰囲気がかたちづくられた。そしてそれは島村抱月の自然主義論に統一され、更には啄木の「時代閉塞の現状」へと推移展開する傾向のものであつた。既に樗牛の「美的生活論」〈三四年〉は、因習の打破と習俗への対立を人間本能の主張として提出していたし、しかもそれが自然主義のゾライズムを準備していたことを思えば、左千夫の立脚地が三十年代のこの思汐に出発していたものであることが理解される。だから左千夫の「生命」「人生」は、このような傾向にある時代思汐から宗教に関心をもつに至るのであり、その立場から到達した人生論であつたと見るならば、彼は三十年代の思汐に出発しながらそこに踏みとどまつて停滞していたと云えよう。当時の自然主義短歌の主張が、極めて左千夫の立論に酷似しておりながら、その実作の上では、観念的感傷におぼれて皮相の人生を歌つたに過ぎぬのに比して、水害其他実生活の苦難を経てからの左千夫の作歌は、人生の真相にむしろ深く潜入したものとなつているのは、実にこの宗教的傾向への指向が生沈滞となつて定着したと見るべきであらう。<sup>52)</sup>

さて左千夫は、このような自然主義支配の前後、特にその後の思汐的混迷期には、もはや自己の立場を左千夫なりに完全に成立せしめていた。それは時代の推移に対しての悲劇的性質を帯びてはいたけれども、青春の混迷期を生き抜いた彼の後進が、やがて継承すべき立脚地でもあつた。彼の「叫びの説」として完成した歌論には、写實的リアリズムと生命主義の融合が、その声調論と相俟



つて短歌の根本問題が総合的に結晶されていた。それは更に茂吉の「内部衝迫」の問題、写生論の体系化へと展開されるべき必然性を胚胎していたのである。

ところで「叫びの説」というのは、晩年新傾向の諸同人と意見が乖離して「強ひられたる歌論」〈四十五年四月〉を發表して以後、彼の自省と論争とによつて起された主体的な歌論であることは先にもふれて来た通りである。「自分の考が稍纏つて明になつて来れば来る程、諸同人の作歌に気に入らないのが多くなる。時々齋藤君等と話して見ると、余程考が離れて来て居る」<sup>53)</sup>そして「短歌に生命を附与せらるるは、必ず言語の声化に待たねばならぬ」と考えていたが、言語の声化とは、叫びの作用にほかならぬことに「短歌研究に心を潜むること十有余年、今にして始めて、三十一文字詩の詩的生命が叫びに負ふ処最も大なることを」<sup>54)</sup>発見するに至り、「概して韻文に、力といふもの無く熱といふものの無いのは、其の韻文中に含まれて居る叫びの分量の乏しさに基因する」との結論に達する。それは「全精神を傾倒した感傷」<sup>55)</sup>としてとらえられた時、「生の感動を声調を通して直接に表現したところの写実を超えて人生象徴に到達した」<sup>56)</sup>一つの窮極美に達するのである。だがこの到達点は、時間的には遅きに失し、「時流への適応」性を欠いていたこと自体に彼のあり方、立場の方向位置づけに限界があつたのである。

#### 四

左千夫は大正二年七月に脳溢血で死んだ。まことにそれは明治と共に生きた人間にふさわしく、明治と共に逝いたの感がある。新傾向を実践し、移り変わろうとする時代の中に、動揺に動揺を重ねていた赤彦・茂吉等門弟との間に疎隔の状態をのこしたまま死んで行つた。「翁の死を以て一区切の覚悟を痛切に感じた」<sup>57)</sup>のはひとり茂吉のみではなかつたであろう。そして「益々調子が乱れ」る中から「子規在世時代の根岸派の歌風とはもう余程ちがつているのみならず」乱調子を通過して「一つの新しい比較的乱調子でない歌風が既に生れかかつてゐた」<sup>58)</sup>のである。左千夫の死による「一区切の覚悟」は、こうした混乱の中から一つの落ち着きを得るに至るのであるが、それはしかし左千夫の確立した生命主義から遠くかけはなれたというものではなかつた。

左千夫は自己の存在を対社会的な相に於いてはとらえなかつた。だから文学の根本問題を人格にありとみ、生命の湧出にあるというような、きわめて単純なわり切り方をし、しかも彼自身にあつては、それが円満に少しも破綻を来さなかつたのである。万葉調の「ますらおぶり」は二十年代の国家主義興隆期に壮年期を迎えた子規には、主体的に時代精神として受けとられたが、そして左千夫にとつてもそれはそのまま素直に受けとれる底のものであつたが、明治後半期の知識人にとつては、もはや「ますらおぶり」をそのまま受け取るわけにはいかなかつた。赤彦は「自己存在の意義を自覚するは、吾人の世に処する第一義である」「文明とか開化とか学問とか憲政とかいふもの、此の第一義を離れて一文の価値だにないと信ずる」<sup>59)</sup>と言つて、もはや「ますらおぶり」や漠然とした人間の生命主義では、彼自身の立脚地が不安になつていた。「自己存在」の意義の追求こそ赤彦にとつては問題であつたのである。そこで「自己存在の価値を自覚して、斯の真価を拡張するために奮闘するは、吾人の世に処する第二義である。」「奮闘といひ、修養といふ、皆苦痛である。併し乍ら此の苦痛は、世上凡百の苦悩とは解釈が違ふ。自己存在の意義を自覚して進むものは、十歩の奮闘は同時に十歩の快樂である。百歩の修養は同時に百歩の快樂である。是に至つて苦痛は即ち快樂の別名である。」<sup>60)</sup>と言う。子規や左千夫の明治的精神にとつては、個人と社会とはまれにみる調和の世界であつたから、苦痛そのものに対する解釈はなかつた。苦痛は文字通り苦痛であり、快樂は文字通り快樂であつた。ところが赤彦は「自己存在」を意識した時、社会に背いて「拡張」しなければならぬ自己を感じ、それは大きな「苦痛」であり「苦痛即ち快樂」という論理は、彼のい

わゆる鍛練道の真髓として成立して行く。それは知識人の「無解決の悩み」による「現実の悲哀」が、解放され損つた生の倦怠として一世を風靡している時、一すじに東洋的鍛練道によつて生きぬこうとした方向にほかならない。それはまた左千夫の生命主義がよつて来るべき一つの帰結でもあつたのである。<sup>61)</sup>

茂吉はまた「生きのあらはれ」「内部急迫」などの用語によつてこれを強調している。いずれにしても生命は主観であり、生命のあらはれは主観的表白であるにほがならない。子規的な客観、いかえれば明治的精神と袂別せざるを得ない理由はここにあつた。

「このごろ長塚氏に会つたとき、『君の歌は面白いが写生風の歌になると、どうも駄目だと思ふ』と云はれた。此言は誠に味ふべき言である。縦し写生する手法が、長塚氏の、『写生の歌』当時の手法と異なるにしても、矢張り根本に於て、真実な写生の味が貫いてゐて、其が土台になつてゐたい様な気がする。正岡先生の云はれた『捉みどころ』といふ事も単に輪廓だけの急所ではなく、もつと深い急所にまで突込んで捉へる様にしたいのである」<sup>62)</sup> ここに至つて彼らの目ざすところは「生命の急所であつて、子規以来の写生からははずれて「真実の写生の味」というような言葉によつてかろうじてつながつて居り、これがやがて短歌は直ちに『生きのあらはれ』でなければならぬ」「内部急迫 (Drang) から予の歌が出る」ということが、「生くしよう>うつし」即ち写生といういわゆる「短歌写生の説」の体系化に連なるのである。

さて子規から赤彦・茂吉に至る写生というレアリズムの伝統は、かくして中間に左千夫の「叫びの説」が介在することによつて、近代的な自己存在の意義追求という面から、近代自我の文学に相触れることとなるのである。「擬古詩」と化したますらおぶりに、新しい肉体を与えようとして「人生を親しみ自然を傍観」した左千夫の態度は、明治三十年前後の時代をまさに具体にしていたが、その先の人間の社会的あり方、自我の運命については左千夫には語るべき何の言葉もなかつた。<sup>63)</sup>

改革者子規の方向づけを、体系化への過渡的存在として位置した左千夫のあり方は、まさに明治の年代と共に終始し、明治的精神と運命を共にした。それは悲劇的な姿をさえ想わせるが、短歌抒情の根元にまでさかのぼることを得た近代短歌史上稀に見る存在であつたとも言えよう。

註 1) 『万葉の伝説』所収。

2) 花田比露思「佐藤左千夫」改造社版『日本文学講座』所収。

3) 同上

4) 中村憲吉「伊藤左千夫」

5) 花田比露思「同前」

6) 『文学』1955・11「芳賀矢一と藤岡作太郎」—黎明期の民族の発見—

7) 左千夫は本名幸次郎を幸二郎・孝次郎・孝二郎などとも記した。

8) 斎藤茂吉『伊藤左千夫』p. 4

9) 改造社版『子規全集第11巻』「演説の効能」に「余は在郷の頃明治十五・十六の二年は何も学問せず、只々政談演説の如きものをなくして愉快となしたることあり」とある。

10) 年譜によれば「明治18年1月30日、衣食の道を求め且つ生先短き両親を奉養せむ希望をもち、金一円<家庭小言には二円とある>を懐にして家出す」とあり。年譜は森鷗外作成のものをもとに斎藤茂吉の作製がある。家出の事情は「家庭小言」にくわしい。

11) 『子規書簡集』明治19年大原恒徳宛。

12) 明治41年白秋・李太郎・秀雄・幹彦らの脱退により、『明星』は百号を以て廃刊せざるを得なかつた。

13) 田山花袋『東京の三十年』の「明治天皇の崩御」『左千夫歌論集卷三』所収「乃木大将の自叙観」芥川龍之介『将軍』森鷗外『興津彌五右衛門の遺書』

14) 新島繁「日本の唱歌」『文学』1955・12所収

15) 明治41年「恋の籬」18首<録二首>

やりがてに下思ふころおし隠し男さびして今悔いにけり  
片時も離れがてにし思ひつつのどに行き来と何に云ひけむ

左千夫歌論小考

- 16) 小田切秀雄『万葉の伝統』前出
- 17) 『左千夫歌論集卷一』所収「新歌論」
- 18) 同上
- 19) 『子規全集卷六』所収「人々に答ふ」
- 20) 『左千夫歌論集卷二』所収「師を失ひたる吾々」
- 21) 『左千夫歌論集卷二』所収「馬酔木終刊の消息」
- 22) 『左千夫歌論集卷二』所収「碧梧桐氏に答える」
- 23) 『左千夫歌論集卷二』所収「盛世の詞章」
- 24) 斎藤茂吉『伊藤左千夫』所収「伊藤左千夫の正岡子規景仰」
- 25) 斎藤茂吉『短歌写生の説』所収「写生の説別記」
- 26) 正岡子規「叙事文」
- 27) 正岡子規「六たび歌よみに与ふる書」
- 28) 『左千夫歌論集卷二』所収「歌譚抄」
- 29) 『左千夫歌論集卷二』所収「万葉論」
- 30) 『長塚節全集卷七』＜河出書房版＞所収「歌譚抄を讀みて」
- 31) 『長塚節全集卷七』所収「枯桑漫筆」
- 32) 『左千夫節論集卷二』所収「新体詩に就きて」
- 33) 『子規全集第六卷』所収「人々に答ふ」
- 34) 『子規全集』第八卷「墨汁一滴」
- 35) 『左千夫歌論集卷三』所収「受動的宗教家」
- 36) 『左千夫歌論集卷三』所収「趣味と信仰」
- 37) 斎藤茂吉『伊藤左千夫』
- 38) 同上
- 39) 丸山静『島木赤彦』p. 75
- 40) 同上 p. 76
- 41) 同上 p. 76
- 42) 斎藤茂吉『文学直路』p. 101 所収の文章より引用。
- 43) 『左千夫歌論集卷二』所収「新しい歌と歌の生命」
- 44) 斎藤茂吉「アララギ二十五巻回顧」
- 45) 斎藤茂吉『文学直路』所収「北原白秋君を弔ふ」
- 46) 「アララギ二十五巻回顧」
- 47) 同上
- 48) 同上
- 49) 「アララギ第三卷九号消息」
- 50) 『左千夫歌論集卷二』所収「悲しき玩具を讀む」
- 51) 吉田精一『現代文学論大系第二卷』解説＜河出書房版＞
- 52) 山本英吉『伊藤左千夫』p. 359。『左千夫歌論集卷二』所収「若山牧水氏の歌を評す」  
「水害の疲れ」六首＜43年＞  
水害の疲れを病みて夢もただ其の禍の夜の騒ぎ離れず 水害ののがれを未だかへり得ず仮住の家に秋寒  
くなりぬ。
- 53) 『左千夫歌論集卷二』所収「歸ひられた歌論」
- 54) 同上「叫びと話」
- 55) 同上「叫びと俳句」
- 56) 山本英吉『伊藤左千夫』
- 57) 「アララギ二十五巻回顧」p. 43
- 58) 同上 p. 48
- 59) 『島木赤彦全集第四卷』所収「漫言」p. 137
- 60) 同上
- 61) 丸山静『島木赤彦』p. 76
- 62) 斎藤茂吉『童馬漫語』
- 63) 丸山静『島木赤彦』p. 76 参照